

金野陸

お盆休み

昼の暑さを締め出していると　もう夕べ

遠くで花火が鳴りだした

清らかなものに拘泥するなら

なぜ己れは　また明日　この家を出て行こうとする？

かなしいと云ってしまおうと

心にぽっかりと月が浮かんできそうに

僕の太陽は煤けた部屋に　すっかり閉じこもってしまった

すると静かに灼けた瞳が　手紙や写真を映し出す

目を閉じることの親しみは

柔和にあつて　追憶にはないというのに

いつでもきらきらそのガラクタを　照らしては眺めてしまおう

それならば　僕は思った　青い星座盤をもって

まだ此処にいることを　驚くべき贈り物にしてしまおう　と

そのとき俄かに　向いの戸口で　はしゃぐ子供の声があった